

測量や映像撮影など、産業の各分野で実用化が進むドローン（小型無人機）が今、レジャー施設などの集客に奔走している。従来、ドローンにまつわるイベントは主に愛好家を対象としたものが多かったが、ドローンに触れたことのない家族連れなどを対象にしたものが続々。活躍の場も、水の中やお座敷へと、裾野が広がっている。

ドローン、客招く

「お魚が釣れたよ」。2018年11月中旬、八景島シーパラダイス（横浜市）で釣りを楽しむエアリアル「うみファーム」。カップルや家族客など数十人がいけすを開いていた。多くの人が釣りざおを振るうなか、異彩を放っていたのはコントローラーを握りしめながらアシを釣り上げる一群。来場者が手もと

エンタメ分野で家族連れ向けに

水中に！お座敷に！

八景島シーパラダイスはドローンの新しい使い方で客を呼んだ



ダイビング コントローラーでドローン进行操作。水中の様子はヘッドマウントディスプレイで見られる



画面で水中の魚の様子が見える

横浜・八景島で釣りゲーム

で操作していたのは、水中を泳ぎ回るドローンだ。磁石でドローンに固定した釣り糸を操り、釣りを楽しめるという仕掛け。コントローラーのスティックを倒せばドローンがゆっくりと水中を進んだり潜ったりする。ドローンの先端にはカメラが付いており、水中の様子はヘッドマウントディスプレイを装着すれば見られる。魚がエサに食いつく瞬間も手に取るように確認できる。

静岡の老舗旅館でレース

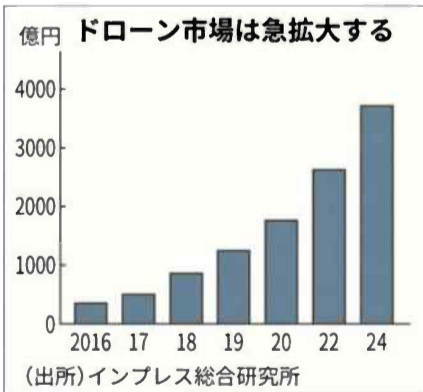
手がけるブルーインベーション（東京・文京、熊田貴之社長）だ。18年11月に計4日間、カメラを搭載したドローンを水中で操作するイベントを実施。約1500人が楽しんだ。八景島シーパラダイスはブルーインベーションからの提案で海と親和性の高いイベントを採用した。担当者は「新たな体験を提供できる可能性が膨らんだ」と話す。同施設では現在、3月末までの期間限定で、来場者と八景島全体をドローンで空撮し、約1分の動画に仕立てて来場者に販売するイベントを実施。今後ともドローンを集客に生かす考えだ。

豊敷きの宴会場で実施したレース、いわば「お座敷ドローン」を体験しようとして集まった人々の9割が10〜30代。レース翌日には西伊豆の空撮スポットを案内するなど、参加者がドローンを持ってきた訪れたいと思ふような仕掛けも入れ込んだ。レースには物珍しさから一般の宿泊客も飛び入り参加した。



「ときわや」で開催したドローンレースでは実際中継などを配信（18年11月、静岡県沼津市）

規制緩和で市場急拡大へ



機体の性能向上や政府の規制緩和を背景に、ドローンの市場は急拡大が予想されている。インプレス総合研究所によると国内のドローン関連ビジネスの市場規模は2017年度に503億円と、16年度から4割増えた。24年度には17年度比で7倍超の3711億円に達する見込みだ。機体販売よりサービスの増加で市場が広がるとみる。国の規制緩和も後押しする。国土交通省は18年9月、人の目が届かない範囲を飛ばす「目視外飛行」の一部で解禁する新基準を定めた。

空撮・操縦教室に脚光

ドローンの飛行台数が増えれば墜落や事故の危険性も高まる。ドローンの活用を進めるには安全面の配慮や対策も今後重要になってくる。

(山田遼太郎)

「泊まりがけでドローンレースをしよう」。静岡県沼津市の老舗旅館、ときわやが18年11月開いた宿泊プランに、長野県や茨城県などから30人が集まった。

新たなタイプのドローンも市場拡大に一役買っている。わずか30分の「マイクドローン」専用の室内型サーキットが18年7月、都内に登場した。ビルの一室でレースを体験でき、気に入れば購入もできる。仕掛けたのは不動産関連会社の「JapanREIT」（東京・港、門田将之社長）。同年11月までの期間中に300人以上が訪れた。現在は新たな屋内施設の開設を検討している。